



大島半島の暮らしを支えた定期船(大島小学校提供)



開通を祝い運行されたバス(西村心一さん提供)



開通前の大島半島の様子(大島小学校提供)



青葉山を望む青戸の大橋



開通当時の青戸の大橋(大島小学校提供)

# なつかしの 写真館

## 青戸の大橋

[大飯町]

### 暮らしを支える海路

小浜湾の南西部、青戸の入江に架かる全長七四三メートルの青戸の大橋。大飯町北部の大島半島と中心地の本郷地区を結んでいます。西方には、若狭富士の名で親しまれる青葉山を望むこともでき、美しい景色に溶け込む姿は多くの皆さんに親しまれています。

青戸の大橋が開通したのは昭和四十九(一九七四)年六月。それまで大島では、船が住民の足となっていました。各集落の船着場には、棧橋や橋板が設けられ、草屋根の船小屋が立ち並んでいました。「青戸の大橋ができて、道が整備されるまで、大島の集落には鹿が通るような道しかなかった。大半の家が漁業を営んでいたから、生活の足として漁船を利用する人がたくさんいた。隣の集落に行くにも、車が通れるような道がなかったから、棧橋から棧橋へ船で移動していたね。」と、大島に住む糺谷義次郎さん(七十九歳)は、当時の生活を振り返り話してくれました。

当時、本郷地区の小学校に勤めていた糺谷さんは、大島と本郷地区をつなぐ定期船に乗って通勤していました。「一日に四往復、朝晩の船は大島の各集落で人を乗せてから本郷に向かっていった。みんな船だけを頼りに暮らしていたから、学校の遠足などがあると、船が乗客であふれかえったもんだよ。」定期船は人ばかりでなく、荷物や郵便物も一緒に運ぶ大島の暮らしになくしてはならない存在でした。

### 待望の陸路

青戸の大橋が開通し、大島には、半島を縦断する県道赤碓崎公園線や海岸沿いの集落をつなぐ町道が整備されました。海路中心の大島の暮らしは陸路中心に変わり、生活の足として大島の人たちに親しまれてきた定期船は、長年の就航に幕を閉じました。

青戸の大橋が開通して初めての夏、観光バスやマイカーが列をなして大橋を渡り、大島は約十万人の人出でにぎわいました。

昭和四十九年九月には、大島と本郷地区を結ぶバスが運行されるようになり、地域の暮らしに密着した交通手段として、地元の皆さんに親しまれました。

青く美しい入江に悠然と横たわる青戸の大橋。今も変わらず、多くの皆さんに親しまれ、観光や産業、地域の生活を支える交通の要衝として重要な役割を担っています。

